

H24「私たちが見つけた歴史的建造物」調査票 <<第4班>>

名称 T邸	所在地 茅ヶ崎市南湖
所有者又は連絡先 T氏	
用途・構造規模・形式・使用実態 用途：住宅 構造・規模：木造平屋建て 敷地面積 約100坪（聞き取り調査より） 建坪面積 104.3㎡（31.6坪）（実測調査より） 屋根：寄棟、長尺波板金属板葺き 外壁：洋室部分は洋風下見板張り、その他の部分はササラコ下見板張り 使用状態：現在居住している	
建築年代（根拠） 1932年（昭和7年）ごろ （聞き取り調査より）	設計者名・施工者名 不明
調査者氏名 久保田貞子、白石英康、相馬立夫 柳橋義行、鎌田美葉子	調査日 2012年10月13日（土）

1. 建築物の沿革

建設は1932年（昭和7年）頃と言われる。

現在の所有者T氏の祖父が、前所有者が住んでいた建物を購入した。

当時、T氏の祖父の本宅は、横浜の山手にあり船乗りだった為、ここは別荘として使用されていた。建設時の家屋は、現在地より数100メートル離れた魚市場の近くに位置していたが、1939年（昭和14年）に曳き家により現在地に移設されたという。

当時、T氏の母は、祖父と横浜の本宅で同居していたが、結婚を機に1941年（昭和16年）に茅ヶ崎の別荘家屋を祖父が母に贈寄し、T氏一家はここに移り住む事になった。

やがて戦争が激しくなり、横浜山手の本宅が空襲を受けて全焼してしまう事により、祖父も茅ヶ崎へ居を移した。

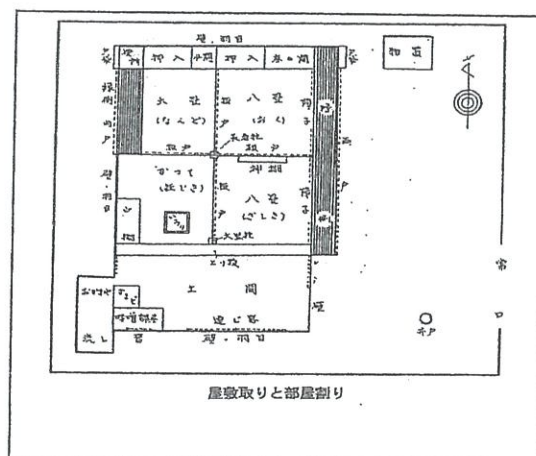
敷地面積は、当初約350坪であったが、1965年（昭和40年）頃南側の一部を売却して約300坪になった。その後、東側の庭であった敷地にアパート2棟建てた。2001年T氏の父が、2009年に母が亡くなり、相続の際、T氏が120坪の敷地とこの家を相続した。T氏は家族で暮らしたこの家に思い入れがあり、この家はどうしても残したいと思ったという。

内部の改装は2回行われており、1955年（昭和30年）頃の台所と北側和室の改装、1965年（昭和40年）頃南側6畳和室は下屋形式で張り出しを増築している。台所と北側和室は、押入により隔てられていたが、それを取り払い2室を連続させ、一部壁をはき出し窓に改装したことにより、住まいやすくなった。

2. 別荘としての特徴

茅ヶ崎は、明治31年東海道線茅ヶ崎駅が開設されたのをきっかけに、医者、学者、宮内庁関係者の大規模別荘が建ち始めた。明治末には200棟余りあったといわれている。その後、関東大震災で茅ヶ崎は大きな被害を受け、大規模別荘に於いても多大な損害を受けたと言われている。しかし復興が進むにつれ、首都圏勤務者の住宅地として人気が高まり、住宅用地、別荘用地としての売買が増加し、中小規模別荘が増えていった。そして第2次世界大戦中は、東京や横浜から戦禍を逃れて、茅ヶ崎に疎開し、そのまま居着き別荘が本宅化された例も多いという。また相続の問題が広大な土地所有者を悩ますこととなり、土地の細分化、分譲化が進み、茅ヶ崎のかつての別荘はそのほとんどが姿を消しつつある。

T邸は、昭和初期に建てられた。比較的小規模であるものの、当時新しい住宅像として現れた「中廊下、一間洋間つき」の住宅といえる。この建物は最初の建築主が不明のため、建築意図はわからないが、当時の南湖の一般的な住宅とは違いがみられることから、実用的な住まいではなく、非日常的な余暇を楽しむ別荘としていたと考えられる。昭和初期頃までのこの地域の一般的な住宅は従来の日本住宅で、いわゆる田の字形の造りで、いなさ（南東からの強い風）を避けるため東向きで、日当たりのよい南側には窓を設けていなかった。



T氏の両親が住み始めた昭和16年頃は、隣接するY神社、T邸周囲は松林であったという。敷地は350坪ほどで、東西に長いL型をしており、当時の門は敷地の東の端に位置し、一番西にある住宅までは庭を歩いていった。庭には竹やぶ、サツマイモやイチゴ畑があった。また住宅の南側の少し低い庭では、タヌキや鶏などの家畜を飼っており、その小屋があったという。小学生の頃になると、その後、父の好みで、門から玄関へアプローチする小路が作られ、その両脇に木々が植えられた。玄関の両脇には槇の木が植えられ、ひょうたん池もあった。現在は、玄関両脇の槇の木、しだれ梅、和室前の大きなアケビの棚が当時の面影をとどめている。

3. 建物の特徴

(1) 外観

建物は、短辺8.19メートル長辺12.74メートルのほぼ矩形、木造平屋建て、屋根は寄棟、長尺波板金属板葺きである。聞き取りと当時の写真によると、当初屋根はスレート葺きであったようである。外壁と軒裏については、洋風下見板張り（イギリス下見）塗装仕上げが、応接間の部分・増築部分・西側の底から下部に張られており、簾子（ササラコ）下見板張りが部分的に残っている状態である。当初の仕上げは不明であるが、建物の状況を考えると、洋室部分の外壁は洋風下見板張り、軒先部分は鼻隠し・軒裏板張りであり、その他の外壁は簾子（ササラコ）下見板張り、鼻隠し打ち垂木現しで仕上げ

られていたと思われる。外部開口部の特徴として、玄関引き戸をはじめ多くの窓が、引違形式であるのに対し、洋室の窓は、上げ下げ窓である。この窓には、鎧戸などの暴風雨や防犯の対策が施されていないが、聞き取りによると、木製の戸を、暴風の時には金物で取り付けていたようである。

(2) 内部

平面的な特徴として、中廊下、一間洋館の特徴がある。また、昭和初期の南湖の一般的な家の間取りに代表されるような、生活を中心につくられたものと違い、座敷と広縁、庭の配置が小規模ながら、別荘建築としての特徴がみられる。

機能面より平面を見ると、台所、茶の間のサービスの部分、便所、浴室の衛生を担う部分、玄関、応接間、座敷など、接客や憩いの部分と、中廊下により部屋を機能ごとに分けた特徴がある。また、現在の台所部分は、ジョチュウベヤと呼ばれていたようであり、北西側廊下の突き当たりの出入口をサービス用の出入口とし、主人たちは、和室と座敷で過ごしたと考え、この建物が小規模別荘建築としてつくられたことを裏付けることが出来る。

各部屋の特徴として、玄関は土台の上に引き戸レールを取り付けてあり、引き戸の上には、壁抜きの照明がある。玄関の大きさは1.82m×2.73m、土間はモルタルタタキで、杢脱石、板張りの上がり段がある。この板張りの部分が、腰掛のようであり、玄関土間と応接間、前室とをつなぐ役割を担っている。壁は砂漆喰、天井は竿縁天井である。

玄関横にある応接間の大きさは、2.73m×3.64mで、高さ1.8メートルのドアが二つある。この二つのドアにより、玄関と応接間、玄関から前室を通り座敷への動線が明確に分けられているようである。応接間内部は、壁・天井が木ずり下地、漆喰仕上げ、天井高さは2.7mである。室内の装飾的特徴は、高さのある幅木、枳周りの額縁、蛇腹漆喰、天井中央の円形装飾モールなどである。上げ下げ窓、ドアの額縁は、モールディング装飾の少ない直線的な作りである。調度品は、T氏の祖父が横浜山手に住んでいた当時の家具（西洋クラシック家具）が持ち込まれており、今も大事に使われているものである。枳類の色と同系色で室内に落ち着きを与えていると共に、横浜山手での西洋風の生活ぶりが想像される。

和室と座敷は、伝統的な特徴が見られる。座敷は、付書院、床の間、違い棚と書院風に作られている。座敷の廻縁は2重で面取り竿縁天井、隣接する和室の廻縁は1重で面取り竿縁天井、廊下は竿縁天井と、部屋ごとの格付けが表れている。広縁は丸桁が使われており、ガラス戸により座敷から庭の様子がよく見えるようになっている。

4. 建築物の価値

道路に面した外壁と上げ下げ窓などの意匠的特徴、建設当初、小規模別荘としてつくられ、庭園があった。部屋の機能を廊下により分けている点、応接間の家具と装飾性、座敷の造作など昭和初期の建築物として貴重な遺構といえる。

5. 景観まちづくりからの考察

T邸は南湖のY神社に隣接する小高い山の上に位置し、南湖院道にある六道の辻を西に入った所にある。南湖院道は古くからの生活道であり、茅ヶ崎駅と結核療養所として1899年（明治32年）に開設された南湖院を結ぶ道でもあった。この地域には広大な敷地を持つ別荘が多くあったといい、道や坂の名前にその名残があるが、そのほとんどが、すでに失われつつある。T邸は、南湖地域に残る別荘建築として貴重である。

また別荘地として発展してきた茅ヶ崎の海沿いの地域は、かつて松原が点在していたといい、この様な松林と別荘の屋敷林などが醸し出す雰囲気、茅ヶ崎らしい景観であろう。しかし広大な別荘の敷地は細分化して宅地となり、屋敷林は失われている。その中で、T邸はY神社の木立とともにあるその佇まいは、茅ヶ崎らしい景観を持つ貴重な資源の一つである。

参考文献

- ・「茅ヶ崎の別荘史 その2・洋間つきの中廊下型住宅」
文教大学 短期大学 川崎衿子 2004年
- ・『日本別荘史ノート』安島博幸・十代田朗 住まいの図書館出版局 1991年
- ・『南湖郷土史』

西村伊作についての考察

(1) T邸の設計者

事前調査時にT様よりT邸が西村伊作の設計ではないかというおはなしがありましたが下記検証の結果T邸は西村伊作設計でないとは推定しました。

(2) 茅ヶ崎と西村伊作

T様はどなたか覚えておりませんでした。ある方にT邸は西村伊作設計ではないかと言われたとの事です。ある方がなぜそうおっしゃったのか理由は不明です。また、いつ頃のお話しなのか不明です。T邸には当初から住まわれていないためか設計図面等は、お持ちではありませんでした。

T邸がある茅ヶ崎には大正13年頃に建てられた生泉堂医院（現存せず）が西村伊作の設計では確認されています。また、昭和7年に建てられた住宅でT0邸（現存する）が西村建築事務所の図面が確認されていますので、地域的に全くゆかりの無い場所ではないです。

T邸が西村伊作の設計であるかどうかを検証するためには、小屋裏などに棟札があれば確認する。しかし無いようであれば、T邸の特徴と西村伊作の特徴でもある平面構成や作風または、竣工年を確認することや使用材料他でどこか合致するような箇所を確認することとしました。

(3) 西村伊作設計の特徴

わが国の中流一戸建ては、明治・大正まで中下級武士住宅の流れを汲んだものであると言われている。それらの住宅は、表つまり道路側に玄関や接客部を設け、そこで主人とその客のためだけの座敷と庭園を配置し、その裏に家族の生活部分を配置し接客部分を重視するものであった。西村は著書「楽しき住家」を出版し（大正8年）主人の見栄や体面のためではなく、家族の為の簡易な洋風住宅つまり旧来の接客本位の住宅から家族本位の住宅に転換することを主張した。

明治39年、彼の生まれ故郷和歌山県新宮でわが国における最初のバンガロー（米国西海岸を発祥の地として当時全米で大流行していた、郊外で自然を楽しむシンプルライフを実行するためのリビングを中心とした実用本位の簡易な住宅である）を建築する。「楽しき住家」の内容はこのバンガローに始まり、この住宅を今後民衆の住まいの手本にするべきと主張した。そしてこのバンガローが今日の居間中心の洋風住宅の祖型になった。

(4) 設計活動時期

依頼者他に配布した「建築案内」によると、業務は設計、監督、施工をあげているが、設計・監督のみはあまり実施していないと記され、設計施工が多かったと推測される。事務所構成で西村は、単に出資者として関わっただけでなく、自ら依頼された建築の計画を練り原案を作成した。西村は自伝に「子供が大きくなって建築をするようになって

から、建築の方の興味をだんだん失って、庭を造ることを楽しみにするようになった」と記している。長男久二は米国で建築を学び昭和5年帰国し、西村の事務所を手伝い始めていることから、西村の建築に関わる活動は昭和10年前までで、この頃より事務所活動から離れていったと思われる。

事務所は御影・住吉事務所と東京事務所の計2カ所あり、それぞれに西村の建築活動を支えた片腕ともいえる者を配置しこの両名の他に、両事務所共に四、五名の設計・監督を行う所員がいたようである。

(5) 西村伊作の作風

まず平面構成。居間がその住宅内での最大の面積を占める居間式住宅が大半を占めている。応接間を設けない住宅も少なからず見られる。寝室のほとんどが独立した部屋となっている。このように彼の作品は、彼の主張を具体化したものがほとんどである。

外観は次のようであることが多い。小砂利混じりの広く平滑な漆喰壁に、渋く光る天然スレート瓦の大きな屋根を掛け、それに開口部枠を褐色にペイントし全体を引き締めている。高級な住宅では外壁に石材を荒々しく用い、白く平滑な壁面との対比が魅力的である。レリーフなどの装飾的要素はほとんどみられない。彼は、外壁に下見板・ペンキ塗りをを用いることは極少なく、彼はこのような物を嫌っていた。

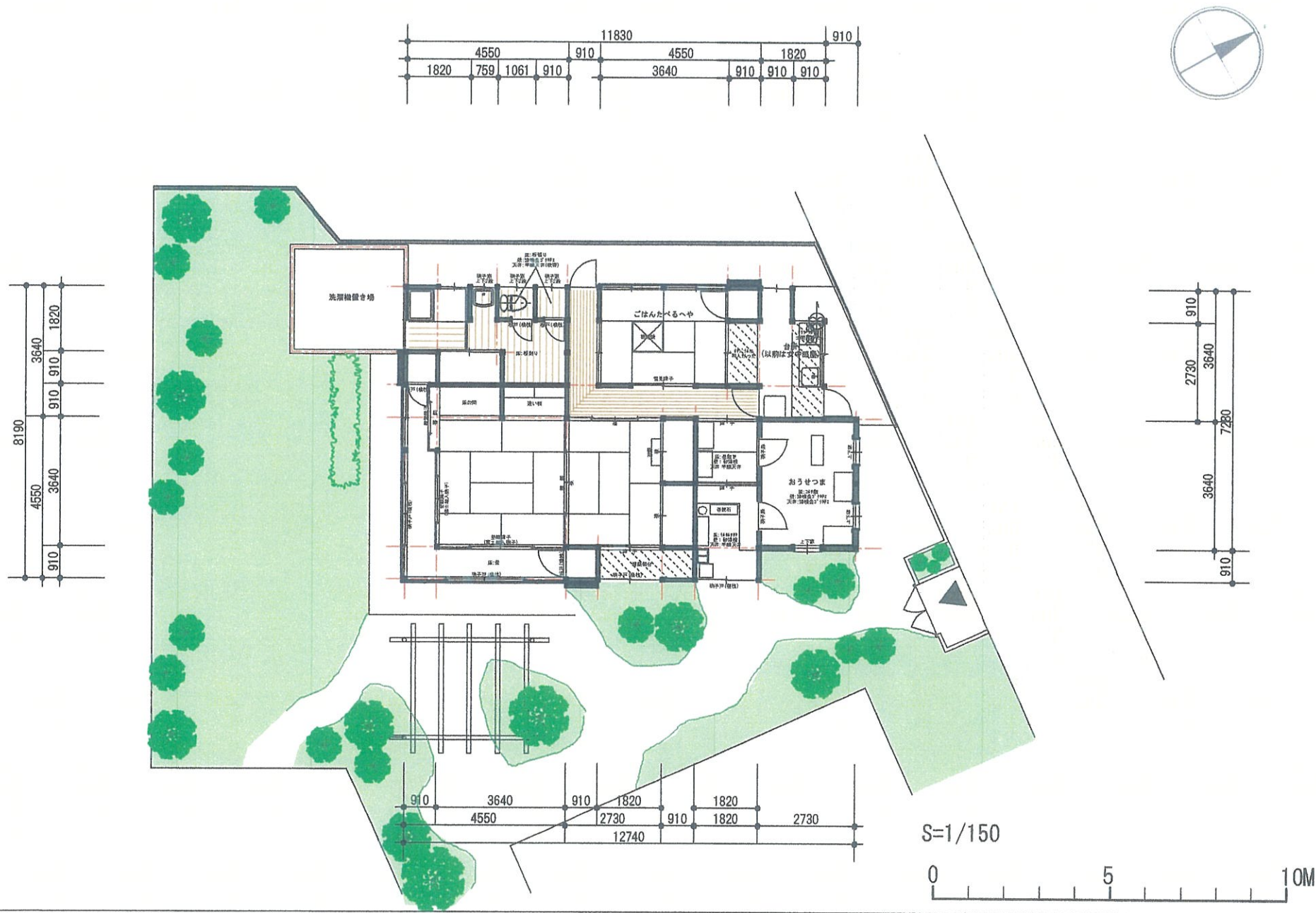
全体的なスタイルとしては、イングリッシュコテージ・英国民家風の素朴なデザインがほとんどであり、彼もそれを好んでいた。彼は著書等で、小住宅ではアメリカンバンガロー、より大規模なものではイングリッシュコテージを推奨しているが、バンガローなどの小住宅の依頼は少なく、彼の事務所への依頼はイングリッシュコテージがほとんどであったようだ。

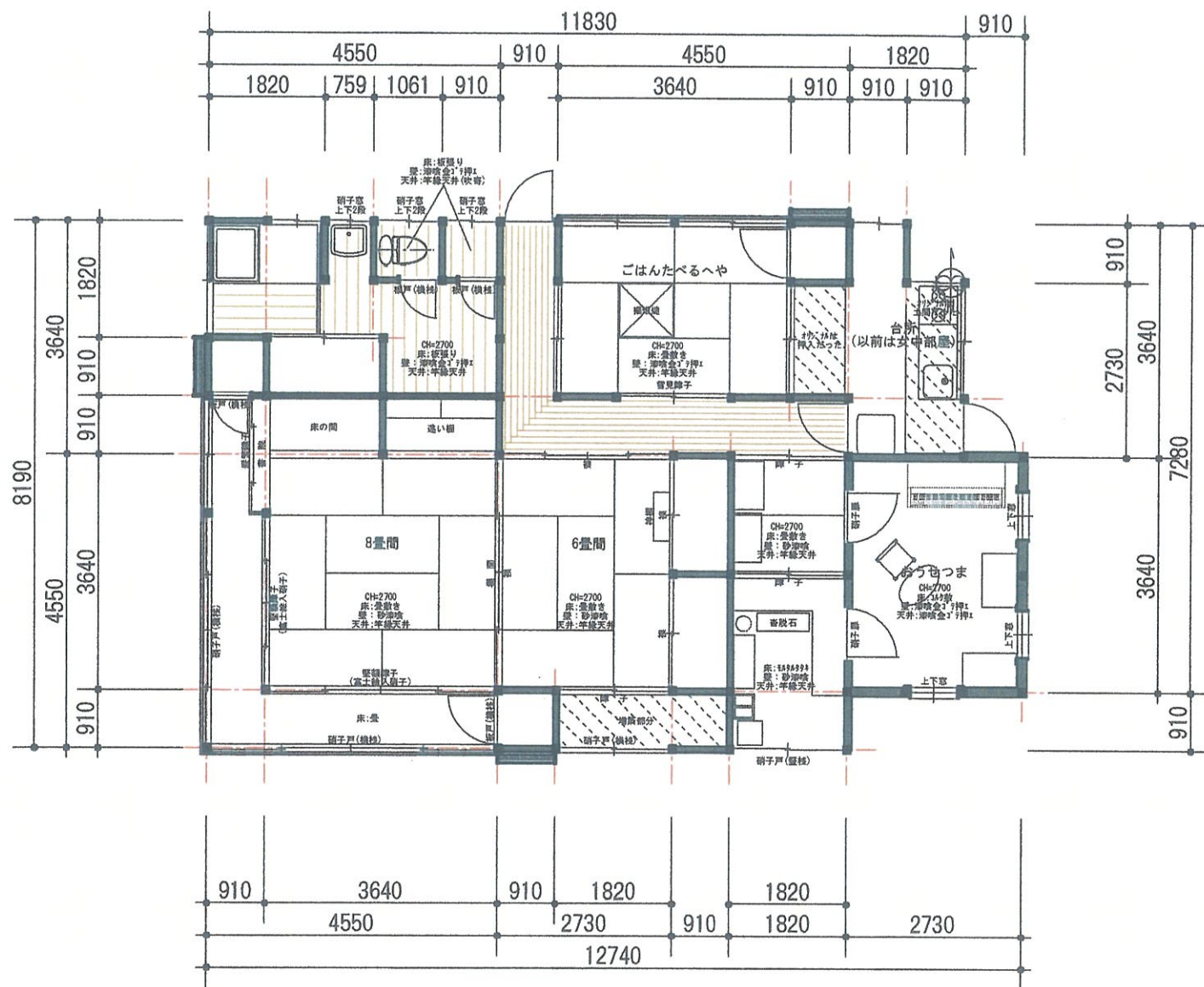
(6) 設計者不明

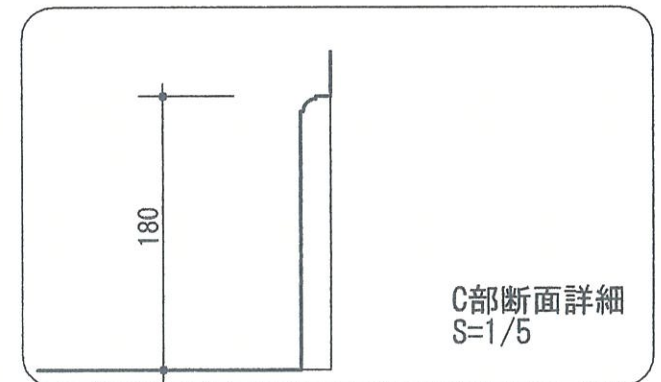
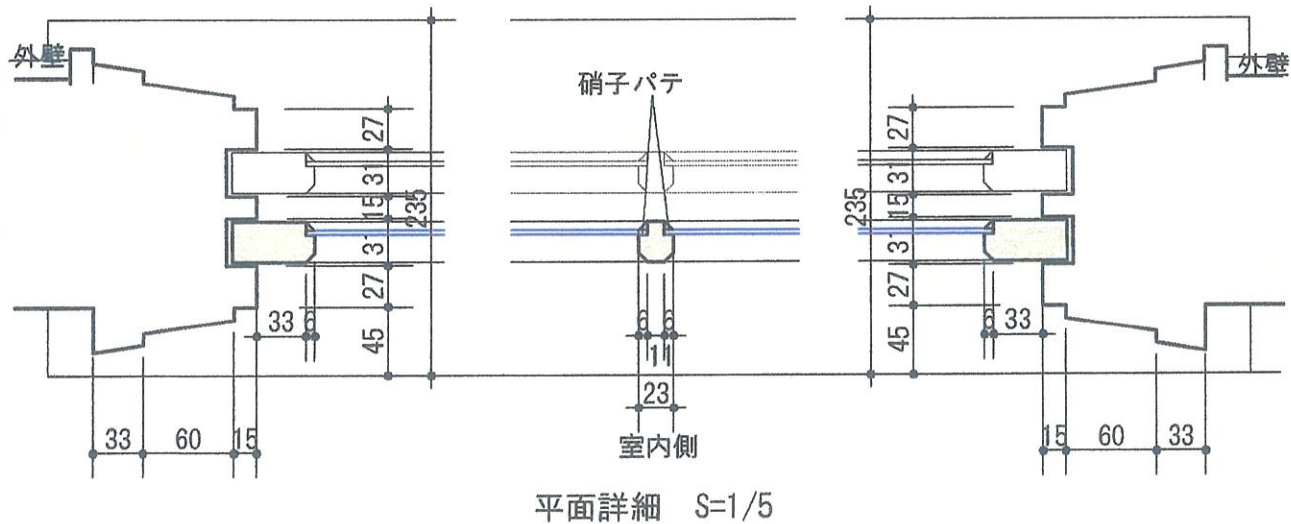
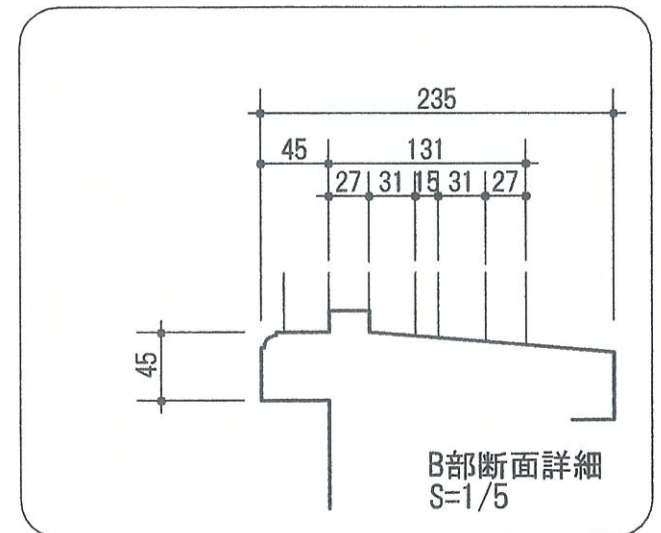
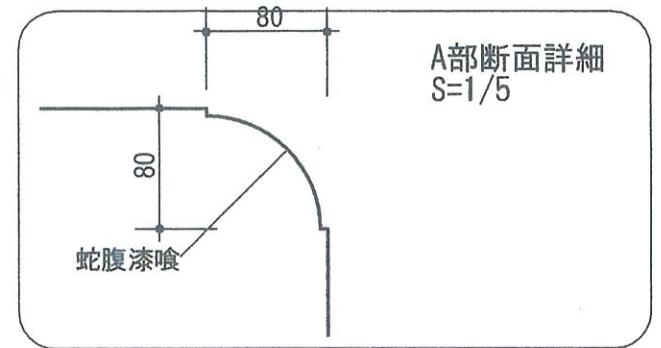
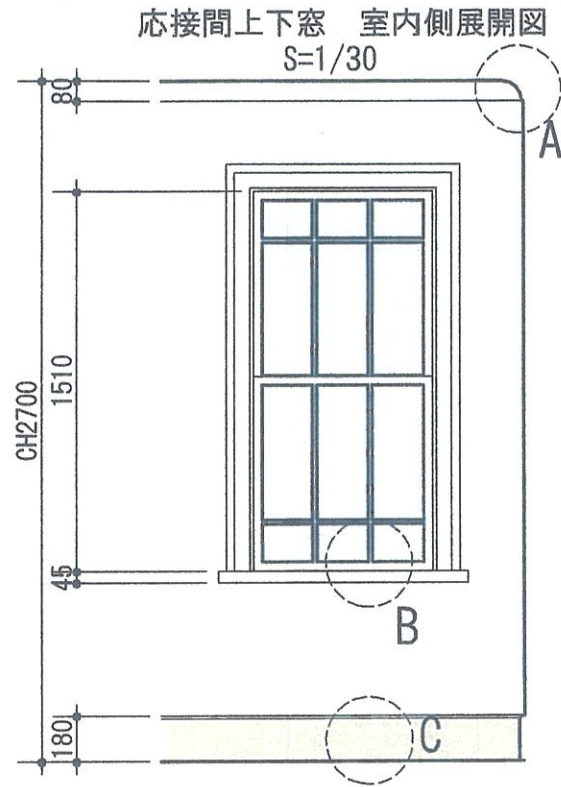
上記西村伊作の特徴・作風・活動時期とT邸と比べると西村伊作の設計ではないであろうと推定した。棟札も小屋裏には確認できなかった。ただし、西村建築事務所の設計であるかどうかは不明である。

先程述べた茅ヶ崎にあるT0邸も平面構成はT邸と同じく南側に和室2室を設け、中廊下式であり、一部応接間と玄関周りのみが洋風であり、外壁材が下見板・ペンキ塗りで他は和風で出来ているなど特徴が似ている点があるからである。西村伊作の設計ではないことが、T邸の価値を損なうということではない。

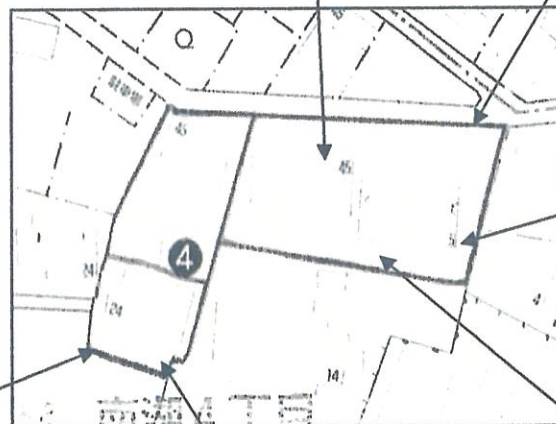
参考文献 『西村伊作の楽しき住家』 田中修司 はる書房 2001年
『愉快的家』西村伊作の建築』 INAX出版 2011年
「藤間家住宅について」 関東学院大学教授 水沼淑子
茅ヶ崎市文化景観セミナー資料より




$$S=1/100$$



昭和 20 年代～40 年代頃の様子



外観写真



道路側からの外観



応接間の外壁



西側外観



西側外壁



南側外観



応接間の上げ下げ窓



玄関引き戸

内部写真



玄関内部



応接間の装飾



応接間のドア枠



窓枠と家具



書院風座敷



和室の廻縁



中廊下の廻縁



広縁の丸桁と小舞天井